

『研究紀要』 通巻39号 1979年10月（能力開発工学センター）

生活における人間修行

— 生涯学習の原点 —

能力開発工学センター所長

矢 口 新

は し が き

現代は転換の時代といわれている。それは本質的にいえば人の心の転換でなければなるまい。そういう所が案外に見過されているようである。

転換の時代といわれる根源には社会の荒廃ということがあっても漸く目に見えつつある。政治家、役人などの汚職は目をおおうものがある。庶民はあきらめて見ている外はないすさまじさである。動乱にならないのが不思議であると言えよう。

そういう面では既に動乱ははじまっているのかも知れない。少くとも、人々の心の底では動乱がはじまっているとも言えよう。しかし、この動乱の中から新しいものを生み出さなければ、我々の社会は崩壊するのではないか。このようなとき、思い出すのは、日本歴史で戦国時代といわれる動乱の時代に、それこそ動乱に苦しんだ多くの庶民たちが、新しい真実の生き方を目ざしてすぐれた文化を多く生み出した事実である。

今回は、そういう庶民の真実の道を求める努力を茶道と武道の歴史でたどって見た。そこには、人間の真の生き方を求めて生涯を学習した人々のすさまじい生き方があらわれている。それは何も大したことをやったのではなかった。毎日している、茶を飲むとか剣を振うとかいうことで、人生の真の生き方を求めたのである。それを中核として、それまで人間が求めた、さまざまな文化教養も統合して、一つの哲学と技術の一体化した生き方を成立させたのである。そういう歴史を見ると現在こそ人々が、誰でもよい、そういう日常の生活の中に真実の道を探求する努力をはじめることが、我々の社会の転換の方向を見出すものになるのではないか。

そんな思いで、この紀要をまとめて見た。

一九七九年十月

所 長

《目次》

序の章	道は時間を超えて生きつづける	3
	—愛されている茶道・剣道—	
第一章	茶の湯の道の探究と成立	4
	—その不思議な生い立ち—	
(一)	生きている茶道—たかが茶を飲むことに	4
(二)	茶の伝来—禅林での茶	4
(三)	闘茶の寄合い—遊戯茶の普及	4
(四)	庶民の茶—本物の芽生え	4
(五)	動乱と創造の交錯—文化を生む力	4
(六)	茶の湯文化の探究	4
(七)	利休の人間像	10
(八)	茶道の中の人生	11
第二章	剣の道の探究と成立	12
	(一) 兵法の道の探究者たち	12
	(二) 泰平の世における剣の道	14
	—剣道修行の哲学と工学—	
	一、進履橋—新陰流兵法之書	14
	二、殺人刀(上)—人を切るにはあらず	15
	三、大学は初学の門也と云事	
	—習をつくして習なきにいたる	16
	四、心の修鍊	18
	五、活人剣(下)	19
	六、無刀之巻	20
第三章	現代生活にかける道の探究	22
	(一) 生涯かけて何をどう追究すべきか	22
	(二) 近代生活にかける道の喪失—人間疎外の根源	23
	(三) 生活実践の中での探究—仕事の中にも道はある	25
	(四) 人生とは生涯の修行であるという事	25
第四章	運転の道の探究	28
	(一) クルマの運転とは何か	28
	(二) 運転のマナーとは何か	29
	(三) 運転の教習とは何か	31

《序の章》

道は時間を超えて生きつづける

— 愛されている茶道・剣道 —

新渡戸稲造博士（といつても若い人は知らない人が多いかもしれないが、明治時代に活躍した国際人である）の名著「武士道」は、一八九九年に英文で自ら執筆されたものであるが、それを当時のアメリカ大統領テオドール・ルーズベルトは自分で多数購入して、知人に配付したといわれる。今ここではその本のことを取りあげるのではないが、この本の緒言をこれまた有名な親日米国人ウイリアム・エリオット・グリッフィスが書いている。その中に次のような文章がある。（岩波文庫本による）

「私は一八七〇年に、アメリカの公立学校制度の方法および精神を紹介するため教育開拓者として日本に招聘されたのであるが、首府を去って越前の国福井に来たり、純粹なる封建制度が現に行なわれているのを見たのは、じつに喜ばしい事であった。その地で私は武士をば異国の物としてでなく、その原産地において眺めた。茶の湯、柔術、腹切り、畳の上の平伏と街上の身を屈める辞儀、刀と往來の作法、すべての、のどかな挨拶と鄭重を極めた物の言い方、技芸振舞いの掟、ならびに妻下婢、小児のための任侠など、武士道がこの城下町と国とにおいて、すべての上流階級の日常生活における普遍的なる信条および実践を成していることを私は知った」と。

これはもう一世紀以上前の時代のことであるが、この中にすべての上流階級の中に、茶の湯だとか、武士道とか、剣道とかが生きていたというところに強い関心をもった。武士道とか、茶道とか、剣道とかが江戸時代を通じて生き続けて来たことを極めて興味深く思うのである。

日本人は、さまざまな技術、芸能、わざに道という概念を結びつけることが好きな民族だといわれている。今ここでは、茶道と剣道を取り上げて見たいと思うが、それらのものがどうして生き続けているのか。茶道も剣道も、現在も益々盛んに人々に愛好されている。茶道は非常に多くの婦人の間に流行し、剣道は学校や町の道場でスポーツ或はそれ以上の人間修行の場として人々に学ばれている。

それらは何れも、我が国の近世のはじまりだと言われる戦国末期（十六世紀末）の頃に略現在ののような姿のものとなったのである。それ以前にも、茶を飲むという習俗や、剣を振り廻して人を斬るという事自体は長い間存在していた。或は茶道や剣道という形に出来上ってから今までの時間よりも、もっと長い歴史をもっていると言ってもよいかもしれない。しかしそれが近世初頭に今のような姿のものとならなかったら、つまり「道」としての修行の姿を整えなかったら、今まで生き続けることはなかったであろう。現代もその十六世紀につくられた修行の形態を根本においては人が守りつづけて、その生活における意義を認めているのである。

道とは一体何であろうか。剣をふるって人を斬る術、生活の中で茶を飲むという風習がどうして道に結びついていったのであろうか。そういうものをどのような人々が、どういう意図でつくり出したのであろうか。

そうしてわれわれが、いまそれを依然として愛好しているのは、どういう理由があるのであろうか。

《第一章》

茶の湯の道の探究と成立

—その不思議な生い立ち—

(一) 生きている茶道 — たかが茶を飲むことに

茶道というのは、現代では一般に抹茶を飲む一定の儀式を含む社交の風習を指すものとなっている。われわれが日常飲む茶はいわゆる煎茶であって、それはもう日本人の食生活と切っても切れない習慣となっている。

しかし抹茶を飲む風習は現代の日常生活にそれ程一般化しているわけではない。にも拘らず、茶道を学ぶという風習はかなり普及している。特に最近では若い女性が茶道の学習に熱心であるといわれる。お茶とお花とお料理というのは、今も花嫁修行に欠くべからざるものと考えている人も多い。

家庭婦人となった人々に茶道をたしなむ人は多いという。それらの人々は、社交と儀礼の学習とまざり合った生活を楽しみ、意味あるものとしているのであろう。日本人の生活文化の真髄にふれるものと考えているのかも知れない。

どうしてたかだか茶を喫するというのに、そういう意味があるのであろうか。茶道とは一体何であろうか。

現代のように茶道が普及したのは極めて新しいことである。茶道と

いう言葉が生れたのは多分江戸時代の初めと言われているが、その頃はむしろ武家階級の武士たちの間に普及していた。もちろん町人や農民の上層階級にも茶道をたしなむものがなかったわけではないが、それは多くはなかった。

このように見ると茶の湯の道というのは、次第に普及の輪をひろげつつあるようである。西洋の文化が入って近代社会が成立してからもそれは決してすたれるというようなことはなかったのである。

われわれの過去の社会が生み出した文化が現代にも細々と生命を保っているというような例もわれわれは知っているが、茶道はそれとは異ったあり方を示していて、今なおますます拡がりつつある。

かと言って、それは日常生活の中に、そのままのものがあるわけではない。それはふだんに飲む茶ではないから、あらたまった場をつくって飲むのである。社交の場の茶なのである。西洋では、家庭同士の交際の場でティーパーティーを開くことがあるが、わが国の茶会はそういうものともちがうのである。

茶道とは、日本人の生活にとって何であるのだろうか。

(二) 茶の伝来 — 禅林での茶

抹茶の文化も他の多くの文化と同様に中国から伝来したものである。十二世紀鎌倉時代のはじめ頃榮西によって伝えられた。(一一六八)

それ以前、すでに奈良時代に遣唐使によって茶の種子が伝えられたが、この頃の喫茶は唐風の団茶といわれるもので、茶の粉末を団子のように固めたものを必要に応じて煮出し、甘味、香料を加えて飲むのである。この唐風の喫茶方式は、平安朝時代に入って遣唐使の廃止とともにすたれてしまったという。

榮西は「喫茶養生記」を著わして、茶が薬用となること、健康に役立つことを紹介した。現に將軍実朝の病氣の際に茶を献じて、実朝をよろこばせたという。(吾妻鑑)

ついで永平寺を開山した道元も入宋して茶を愛好するようになり、「永平清規」(修行僧の学則とも云うべきもの)の中に喫茶、行茶、大座茶湯などという茶礼を制定している。

このようにして、禅林の中では喫茶の風習が徐々に定着して来た。更に鎌倉の末期には中国禅林の茶儀も紹介されたりしたが、それらが次第に禅林以外にも喫茶の風を普及させるものになった。

ところで現代のわれわれの云う煎茶を飲む風習は、江戸時代のはじめ頃(十七世紀)に隠元禅師が伝えたと言われる。ついでに煎茶の中で玉露というのがあるが、これは抹茶に使用する葉を煎茶用にしたもので、明治のはじめに辻利右衛門という人がやり出したものだという(桑田忠親氏「茶道の歴史」による)

(三) 闘茶の寄合い — 遊戯茶の普及

抹茶の風習が一般俗人に普及するに至ったのは、鎌倉末期に宋で行なわれた闘茶の風が輸入された頃といつてよいであろう。そして南北朝時代から室町時代の初めにかけて武士達を中心にして大流行をした。

闘茶というのは、本茶と非茶とを飲みあてる競技会である。本茶というのは榮西の弟子明恵上人が榮西からもらった茶の種子を梅尾に植えて、それが良質の茶の木に育ち、南北朝以後、梅尾産のものを他の産地と区別して呼ぶようになったものである。他の産地の茶は本茶に対して非茶と呼ばれる。

この闘茶の遊戯の詳しいことを述べる必要はないが、四種十服とい

って四種類の茶をさまざまな順序で喫し、それを言いあてるのである。適中率のよいものを勝として賞品を出す。これは、現代は三種五服の茶合わせとなって茶かぶきと言われる。利休が改めたのである。

所で闘茶の流行は、南北朝時代の動乱を生きる武士たち、或は新興階級の趣味に合したものと見えて、非常な流行をしたらしい。当時社会は大きく変動していた。新たな階層分化が行われつつあって、それらの庶民がそれぞれ自己の主張をもちはじめた時代であつたろう。そういう点では時代そのものがギャンブルの時代であつたのかもしれない。

粗野な武士や庶民が新たな生活や文化を生み出すエネルギーの始動がはじまっていたのかもしれない。闘茶という遊びは、そういうエネルギーによって益々そのギャンブル性をエスカレートさせていった。茶会というより酒食の寄り合いとなり、賭博を伴う野放図な快楽追究の場となる。

南北朝時代から室町初期へかけての有名なバサラ(印度で無遠慮という意味)大名佐々木遺誓は茶会ずきで相当華美な寄合をやつたらしい。太平記には次のように書かれている。

都には、佐々木佐渡判官入道道誓を始めとして、在京の大名衆を結んで茶の会を始め、日々寄合、活計を尽すに、異国本朝の重宝を集め、百座の粧をして、皆曲景の上に豹虎の皮を布き、思々の緞子金欄を裁きて四主頭の座に列をなして並居たれば、只百福莊嚴の床の上に、千仏の光を双べて坐し給へるに異らず。

これは服装を述べているくだりである。虎や豹の皮の座をつくり、金らんだんすの服装でならんだ所は、金仏をならべたようだというのである。次は食べ物である。

異国の諸侯は遊宴をなすとき、食膳方丈とて、座の囲、四方一丈に珍物を備ふなれば、それに劣るべからずとて、面五尺の折敷に、十番の齊羹、點心百種、五味の魚鳥、甘酸苦辛の菓子共、色々々居双べたり。

贅沢の限りをつくすことが出来たのも、ある意味で下剋上の時代であつたのであろう。バサラ大名というような傍若無人の大名が出現したのも時代といえは時代なのであろう。次はかけの賞品である。

飯後に旨酒三獻過て、茶の懸物に百物、百の外に又前引の置物をしけるに、初度の頭人は、奥染物各百づゝ六十三人が前に積む。第二度の頭人は、色々の小袖十重づゝ置く。三番の頭人は、沈のほた百両づゝ、麝香の臍三づゝ副へて置く。四番の頭人は、砂金百両づゝ金絲花の盆に入れて置く。五番の頭人は、只今仕立てたる鎧一縮に、鮫懸たる白太刀、柄鞘みな金にて打ちくくみたる刀に、虎の皮の火打袋をさげ、一樣に是を引く。以後の頭人二十余人、我人に勝れんと、様をかへ、数を尽して山の如く積み重ね。さればその費幾千万といふことを知らず、是をもせめて取つて帰らば互に此を以て彼に替たるものとすべし。

話半分としてもこのかけものは大したものて人に負けまいと出す。競争なのである。せめて自分の出した分を他のもので埋合せができればよいが、供につれてきた逃世者、傾城、白拍子にみなとられてしまったという。これでは、

只金を泥に捨てゝ玉を淵に沈めたるに相同じ。この茶事過ぎて後、また博奕をして遊びけるに、一立に五貫十貫立ければ、一夜の勝負に五六千貫負ける人のみありて、百貫とも勝つ人はなし。これも田楽、猿楽、傾城、白拍子に賦り捨てける故なり。

これはギャンブルの高度成長とでも言ったらよいかもしれない。庶民から奪いとった財宝であろうが、そういうものが集められる時代であつたことも確かなのであろう。

こうして茶会なのか、酒宴なのか、賭博の会なのか、淫靡な遊びなのか、放埒無慚なものへとエスカレートして行つたと思われる。足利尊氏が定めた建武式目（一三三六）にも禁止条項があるところをみるとかなり目に余つたのであろう。しかしいつの世でも禁止条項などというものはいつの間にかうやむやになるものらしく、茶寄合は一向下火にならないようである。

（四）庶民の茶——本物の芽生え

「上の好む所下これにならう」などという諺があるが、武士や貴族に茶会を開いて楽しむという風習が盛になれば、それは庶民の間にも当然及んで行く。この時代の庶民は前にも述べたように、そのエネルギーを爆発させて、さまざまな新しい生活の仕方を生み出した。多種多様な職人が生れたし、それらの庶民がかなり広範囲に亘つて流動した時代でもある。わけても都市ではかなり活気を呈していた。新興階級の進出して来る時代とも言えるかもしれない。

そういう庶民も当然茶会を営んでいたと思われる。特に財力をもつた者たちは当然、武士たちと同様な形の遊びもしたと思われる。

しかしもっと下層の一般庶民は、そういう茶会ではなく、くつたくなのい雲脚の茶会などといわれる野外の茶会（地下茶の湯）を催していたのではないか。一服一銭の茶売り、茶立女が社寺門前に立って往きかう人々に茶を供している昇風絵などがあるところを見ると、喫茶の風習はもう庶民にまで行きわたつていたと思われる。そしてそれは武士の茶会よりはるかに健全な茶であつたのではないか。それがや

がて茶道へもつながるのであろう。

(五) 動乱と創造の交錯 — 文化を生む力

十四世紀末になると南北朝動乱も漸くおさまって来る。しかし世の中が全く平和というわけに行かない時代であった。しかしともかく南北朝動乱を経て、新たな社会秩序が生れ出したことは確かである。鎌倉時代とは異なった新たな武家の社会が生れる。武家礼法の制定などにも見られるように、新たな秩序が求められつつあったのである。しかし政治的には異って守護大名の力が強く、鎌倉幕府とは全く性格の異なった政治権力であった。また長い王朝時代を通じて政治権力にとにかく力をもっていた公家の力が大きく後退した。大きく見れば公家の勢力はこれ以後再び社会の表面に出ることはなかったといつてよい。時代は南北朝の争の時代を経て大きく動いたのである。新たな階層や集団が全国的に形成され出して来る。富が集中した所では都会が出現して町衆が生れて来る。こうした新たな成上りの武家や庶民によって、新しい生活文化が創造される時代に入ってきたのである。

武家たちは動乱を通じて公家たちと何等かの点で接触を深めたにちがいない。また新興の庶民たちとも新たな関係を生み出したであろう。そういう接触によって新たな文化創造のエネルギーが生れたのであろう。その中心はやはり武家であった。それが今日われわれの言う室町文化である。そして王朝文化はこの時代をもって、その終末をつける。以後公家貴族は文化の創造には関係ないといつてよいであろう。別な言い方をすれば公家の文化と武家の文化とがこの時代に統合されたといつてもよいかも知れない。

だがそれは単なる統合ではなく武家による征服であったとも言える。しかし征服者もまたおのれ自身を変身させている。それは三代の

將軍足利義満の異常な昇進にもあらわれている。その昇進とは公家貴族の秩序の中での出来事なのだが、足利義満は三十八才で太政大臣にまで昇りつめてしまう。

十四世紀末から十五世紀末まではそういう新たな文化を創造する時代だったのである。勿論それは今から見てのことであるが。

室町文化をわれわれは二つに分けて足利義満を中心とした北山文化の時代(十四世紀後半の時代)と、將軍としては愚物だったという世評をもつ義政を中心とした東山文化の時代(十五世紀後半)とする。

しかしそれは今から思えば、新たに京へ上って来た成上りの武家、庶民たちが、王朝文化を吸収して新たな都市文化をつくりあげて行く道程だと言つてよいであろう。そしてそれは、やがて来るべき近世社会への動きをも内にひそめていたのである。この時代につづくのは戦国の世であつて、そこにまた動乱が生じるが、その動乱の中から、更に新たな文化がまた生れるという時代なのである。

たとえば有名な東山山荘(銀閣として知られている)の書院造りは、わが国の建築史上でも画期的なものといわれるが、それは現代の庶民の住宅にも生きつづけている。

その銀閣は義政の祖父義満の営んだ北山山荘を土台にしていることも人のよく知る所である。つまり北山から東山へと文化は次第に成熟をとげて行つたとみることが出来る。しかしこの成熟には庶民的なものを取りこんで来た所に成り立ったのである。それがこの時代の文化が近代にまで生き残る感覚をもった所以であろう。

能楽もまたそういうものとして、庶民の中から生み出されて来た。狂言は更に庶民的な感覚を強く出している。現代のわれわれのセンスにも合致する所があるのである。

石の庭園として有名な竜安寺の庭園が、この時代の文化の性格を表現するものとして珍重されている。そこにも王朝文化とは全く異つた

新たな世界観が表現されている。

五山禅僧の文学的作品もそうであるが、それらの僧の生み出した水墨画もまた全く新しい文化と言ってよい。その頂点には雪舟が居ることは人のよく知る所であるが、彼の表現しようとした世界は禅の思想にもとづく自然観照の世界であって、それ以前の禅画とちがって、一般の人々に理解されるものである。そこにもある意味で庶民の感覚が生きているといえるかも知れない。

一休もまたこの時代の動向を代表した人と言ってよい。虚色を去って人生の真実を生きようとする生き方も、この時代のエネルギーを表すものであろう。彼は後小松天皇の落胤という伝説もあるが、乞食のような生活をしたこともあるという。そこにまた庶民の感覚が感ぜられる。

連歌の宗祇もやがて俳句の芭蕉へつながる世界を追究した人であるという点では、王朝文化の和歌の世界とは全くちがうものを創造した人といってよいかもしれない。

庶民的な傾向といえば、この時代の宗教家たちもまたそうであった。親鸞以来の伝統もあるが、この時代の運動家蓮如が、北陸路の門徒を集集したときの彼の行動は極めて庶民的であったという。訪れる門徒に対して身分をこえて同朋同行として扱い、寒夜に酒を暖めてくみかわしたという。そういうことが成り立つ社会の情勢であったのである。一四三九年足利学校が生れたというのも、そういう地方の人々の文化的エネルギーや意欲を感じさせるのである。

このように見ると、この動乱の時代はまた一方で新しい文化の創造の時代であったと見ることができる。しかしそれは今から見れば文化の創造であるが、その時代の人は、それが新しい文化の創造かどうかを考えて行動したのでなく、あらんかぎりのエネルギーを出して、真

実の生き方をもとめていたのである。一方には物欲を追究するという秩序の中で全精力を使っていた人々もあると同時に、一方ではそれを超越して人間の生き方を生きようと努力していた人々もあったのである。二つのどちらにもエネルギーが爆発しつつあったのである。

(六) 茶の湯文化の探究

こういう時代のもどきの中で茶の湯の会のあり方も新しい方向をたどりだす。時代は公家の時代でもなく、鎌倉武士の時代でもなくなってきた。庶民を含めて新たな人間の生れつつある時代であったのである。

茶の湯の会もそういう中で、微妙な変化をはじめた。そして以後一世紀以上もかかって新しい茶道が生れるのである。

茶の湯が変化しはじめるのは十五世紀後半、將軍義政の頃からであった。義政は將軍としては愚物であったといわれるが、文化の面からみると、文化的感受性がゆたかであったのかもしれない。当時東山荘には、義満以来財力によって集められた宝物が外来の唐物を含めてその数を知らずといわれた。恐らく数千点にもものぼったのではない。義政は同朋衆（將軍に近侍して茶会、宴席の世話をしたり、道具の鑑定など文化的な相手をする役名）の能阿弥に命じて、その珍器名宝の整理をさせた。そういう一連の仕事として新しい茶の湯の方向をさがし求めていたのであろう。能阿弥に命じて闘茶の会の会所飾にかわって書院の中の広間で行なう茶会の際の書院飾の方式を定めて唐物の道具を用いることを規定した。また台子の点前、台子飾り、点茶の服装などについても一定の制式をつくった。殿中の茶の方式も定めた。茶会のある頃の方に不満をもっていたのであろう。

この頃のことには次のような話が残っている。ある時、義政が能阿弥

にさまざまな遊びにも飽いてしまったが、何か面白いことは聞いたとき、能阿弥が茶の湯の道は年中を通して面白いが、珠光という者がこの道を三十年追究し、孔子の道も心得、更に一休禪師について学び、それらを茶室で生かしているといつて推挙した。珠光が將軍の茶の師範となつて以来、珠光流の茶の湯の流行の道が開かれたという。

この話は有名な茶書「山上宗二記」(やまのうえそうじきと読む)に記されているが、(山上宗二は利休の一番弟子であるが、この書物は珠光以来の相伝にもとづいている由緒正しい一級の茶書といわれている)その頃の茶の湯の流行を「其の比、茶の湯せざる者は人非人と等し。諸大名は言うに及ばず、下々殊に南都、京、堺町人に至る迄茶の湯専一とす」と宗二記は記している。

これを見ても、当時の社会がどのような方向に動いていたか、何を求めていたかが察せられるではないか。時代ははつきり転換のきざしを見せていたのである。義政はそれらの人々を召し出して雑談をしたという。

宗二記には、「京、堺に珠光の弟子多し。大抵聞き及ぶ衆、松本、篠、道提、善法、古市播州、西福院、引拙」と書いてあるが、その道の達人であつたのであろう。続いて義政の死後も代々將軍が茶の湯の会を開いて、今に至るまで(秀吉公の時代までということである)繁昌している。そのあとつぎは、宗珠、宗悟、善好、藤田、宗宅、紹滴、紹鷗であると書いている。

山上宗二記には、また次のように述べている。目がきいて(センスがあつてということ)、茶の湯が上手である者を茶の湯者という。気のきいた茶道具一物も持たず、さとり切つて茶の湯のあり方に創意工夫を加え、腕前がしつかりして居る者を数寄者(すきもの)という。唐物もち、目利きもあり、茶の湯も上手で、わびの道にも志が深いのを名人というのである。

これを見ると、もう茶の湯のあり方が、あの闘茶の頃とは一変しているのである。恐ろしい程の社会の変化ではないか。山上宗二は利休の弟子であるから16世紀末の人と考えてよい。義政の頃から1世紀の間にすつかりかわつてしまったのである。

山上宗二記に珠光の言葉として有名な「茶湯者覚悟十体」というのがある。茶の湯の師匠としての姿勢を説いたものであるが、

- 一、上ヲ^{そそう}觥相、下ヲ律義ニ信在ル可シ
- 一、万事ニ嗜、氣遣
- 一、心ノ内ヨリ奇麗数寄
- 一、酒色ヲ慎シム

こういう姿勢は、もう全く闘茶の会の姿勢とはちがうのである。珠光以後こういう精神が社会に行き亘つて行つたのである。

珠光以後の一世紀はいわゆる戦国の世であつて、下剋上は益々はげしく、つまり庶民的なエネルギーが古いものをおしのけていった時代である。南北朝の動乱のときのようにある意味で成上り者があらわれた時代である。信長、秀吉もその最たる者であらう。がその成上り者たちも佐々木道誉のようなばさら大名とはまた一風かわつて居たのであろう。信長、秀吉とともに利休を茶の湯の師匠として学んだのである。

利休の哲学は、彼の弟子によつて次のように述べられている。

「小座敷の茶の湯は第一仏法を以て修行得道する事なり。家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事なり。

家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにてたる事なり。是、仏の教、茶の湯の本意なり」

(南方録)

また、こうも述べている。

「小座敷の道具は、よろず事たらぬがよし。」

茶道の世界では、珠光を開祖、紹鴎を中興の祖、利休を教祖などと言っているが、この三人が戦国の世に茶の湯で人間の新たなあり方を探究した代表者というわけであろう。しかし前述したように、そういう精神で茶の湯の修行をしようとしていた人達は、もう数限りなくあったといつてよいであろう。戦国の世というのは、そういう点でも戦国であったのかもしれない。

(七) 利休の人間像

利休は信長に十年、秀吉に十年、茶頭（茶の湯の世話役とでも言ったらよい）として仕えたが、茶の湯以外の文化的な道での指南役としてこの成上りの武将たちを育てたのではないだろうか。次に利休の人柄を示す二、三の逸話を紹介しよう。これは桑田忠親氏の「茶道の逸話」に出ているので読んでいただくとよいと思う。

(その一)

ある日安土城で信長が庭をあちらこちら歩いていたとき、利休もその供をしていた。突然信長が泥よけの馬具の形はどのようなのがよいか描いてみよと言つて、杖をわたした。利休は地面にその形を描いてみせた。信長は小姓に命じてそれを記録させておいたが、後日また同じことを利休に命じた。利休が描いたのは全く前のものと同じであったので、信長は利休の識見に感じ入ったという。

(その二)

あるとき前田利長が近臣に告げて言うには、天下に恐ろしいことが三つある。一つは大閥秀吉の前に出ること、一つは春屋和尚の前に出

ること、いま一つは利休居士の前で茶を点てること。この三つである。しかもこの三つのうちで利休の前で点茶するときほど恐ろしいことはないと言つたという。

(その三)

春の頃秀吉が大きな金の鉢に水をいれて傍らに紅梅を一枝置いて、利休に花をいけよと命じた。近習たちがこれは難題だと思つてかたずをのんで見ていると、利休は紅梅の枝を逆手に取り火鉢にさりとしごきいれたので花の開いたのと蕾のままのところが入り交つてふんわりと水の上に浮かんだあり様は、えもいわれぬ風情であつたという。

これらの話は利休が単なる茶の宗匠ではなかつたことを現わしているようである。教養の広さ、見識、迫力、創造的行動力、そういうものを利休は茶の湯の修行を通じて身につけたのであろう。

信長、秀吉などのある意味で成上りの天下人が、利休の茶の場の道を学んだということは非常に興味あることである。尤も利休はただ茶のことでなく、文化的な方面のブレンであったらしいことは、秀吉の弟の秀長が、外むきのことは私、内々のことは利休がとりしきつているといった所からも察せられる。

秀吉は有名な聚楽第をつくり、黄金の茶室をつくつた人である。本質的に利休の哲学をどれ程理解していたかは怪しいものがある。結局、二人の意見は合わずに、利休は最後に切腹をすることになる。一五九一年であるからもうすぐ江戸の時代が始まる頃なのである。

世俗的な権力者と文化の道での真実の探究者との宿命的なちがいを感ぜさせる。文化とは心を耕すことであり、政治権力は場合によっては、否しばしば心をふみにじるのである。

現代は利休以後更に四百年を経ている。江戸の時代を通じて明治から昭和まで、利休の茶道はさまざま人々に愛されつづけている。そこ

には何があったのであろうか。何があるのか。

(八) 茶道の中の人生

岡倉天心は、有名な著書「茶の本」の中で茶の湯の道のことを、禅と結びつけて次のように紹介している。

「禅の主張によれば、事物の大相対性から見れば、大と小との區別はなく、一原子の中にも大宇宙と等しい可能性がある。」

「祖師を除いて禅僧は悉く禅林の世話に関する何か特別の仕事を課せられる。そして妙なことには、新参者には比較的軽い務めを与えられたが、非常に立派な修行を積んだ僧には比較的煩わしい下賤な仕事に課せられた。」

「こういう務めが禅修行の一部をなしたものであつて、如何なる些細な行動も絶対完全に行われなければならないのである。」

「こういう風にして、庭の草をむしりながらも、蕪菁を切りながらも、又はお茶をくみながらも、幾つも幾つも重要な論議が後から後から行われた。」

「茶道一切の理想は人生の些事の中にでも、偉大を考えると、この禅の考から出たものである。」

「茶室は寂莫たる人生の荒野に於ける沃地である。」

「真の美は只不完全を心の中に完成する人によつてのみ見出される。」

天心が喝破したように、たかが茶を飲むという些細な事の中に人生がある。発見できるのではないか。

一服の茶の中に、或はささやかな室で一服を友人にふるまって交わりを結ぶ中に、人生の人と人とのえにしを感じずという、極めて真剣な

生き方がある。それが殊更でなく、平常のこととして行なわれる人は、達人であらう。

それは一切に通ずる心を育てたことになるのであろう。天心は更に言う。

「茶の原理は、普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは倫理、宗教と合して、天人に関する我々の一切の見解を表わして居るものであるから。」

それは衛生学である。清潔を厳しく説くから。それは経済学である。と言うのは複雑な贅沢というよりも寧ろ単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾可学である。何となれば宇宙に対する我々の比例感を定義するから。

それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている」と。

《第二章》

剣の道の探究と成立

現代は、剣道は外来のスポーツとならんでスポーツの一種と考えられている。しかし、剣道という言葉が示すように、単に剣を振って相手からポイントをとるというフェンシングとは異なるムードをもっている。つまり人間の全体的な生き方の修行にかかわりをもっているという考え方があるようである。

しかしそれは、剣道がはじめからそういうものとして存在したのではない。そういう道として成立して来たのには長い前史があり、それが戦国の末に特に道を目指して努力をした人々の力によって成立して来たのである。

ここでは、柳生宗短の書いた「兵法家伝書」によって、そのことをしらべてみよう。

「兵法家伝書」は十七世紀初頭の寛永九年（一六三二）に柳生宗短によって完成されている。戦国の世のくすぶりのような大阪戦争が終ったのは一六一五年であるから、平和が漸く定着し始めた頃であるといつてよからう。一六三七年には島原の戦闘があるが、それはもう乱にすぎなかった。

この兵法家伝書の末尾に宗矩がこの書の成り立ちを次のように書いている。この書は進履橋、殺人刀（せつにんとうと読む）、活人剣の三巻から成っているが、その内容は自分の亡父宗厳（石舟斎といわれた人）が上泉伊勢守秀綱から直伝されたものに、それ以後亡父と自分が工夫して到達した所を書いたものであると。

つまり、三代がかりで探究した兵法の道であるというのである。

（一）兵法の道の探究者たち

この三代が生きた時代はそれではどういう時代であったのか。上泉伊勢守（こういずみと読む）は十六世紀の初め、くわしく言えば一五〇七年戦国動乱のただ中に上野国大胡城主の子として生れている。後半生は、戦国の世の終りに近づいている時代といつてよい。当時上野国一帯をめぐって上杉・武田の争いは激しかった。上杉・武田の川中島の戦があつたのは永禄四年（一五六一）で、その前年は織田信長が桶狭間で今川義元を破っている。

ついでに当時の状況を大きくとらえてみると、信長が略天下統一の緒について中道にして死んだのは天正十年（一五八二）であるから、桶狭間より約二十年後である。応仁の乱は一四六七年にはじまったといわれているから、その頃からみると、ちょうど百年である。

戦国の世も漸く最後の段階に入っていたのである。これはもちろん、今から見てのことで当時の人はそんなことがわかっていたわけではないことは勿論である。

特に兵法のことに關して注目しておかなくてはならぬことは、鉄砲の利用による戦闘の様相の転換である。信長が鉄砲の大量使用によつ

て武田の軍を長篠に破ったのは一五七五年（天正三年）であつた。ちなみに鉄砲の伝来は一五四三年であるから、三十年にして大量使用の段階に達したのであるから、当時の日本の生産力はめざましいものがあつたと言つてよい。

さてそういう時代の一五六三年秀綱（五六才）は、武田信玄の上州制圧とともに、大胡城を出て兵法者たるの道を選んで諸国修行の旅に出たといわれる。信玄が秀綱の人柄を惜しんで、そういう措置をとつたという。

武將たることをやめ、戦闘をやめて兵法者たる道をえらぶというのはどういう心境であらうか。この時彼が考えていた兵法とは何であらうか。この当時兵法は様々な流派があつたらしいが、戦場で剣をふるうことが何よりも緊急のことであるから、それへ向つての探究、つまり殺人の研究であつたのだろう。秀綱は、そういう剣法でなく、心を養う剣法を目ざしていたと言われるが、後の兵法家伝書の方向は既に秀綱のイメージとしてあつたのかもしれない。そうだとすれば、それは活人剣の道であつて、平和剣法であることになる。兵法者として諸国修行に出たということはそういうことを物語るのかもしれない。

永祿八年（一五六五）秀綱は柳生を訪れて、柳生宗厳に彼の工夫した新陰流の印可を与えた。この時はまだ宗矩は生れていない。（宗矩は一五七一年生れである）宗厳は一五二七年生れであるから、この時三十八才であつたらうか。身心ともに充実していた時であらう。

宗厳も剣法に志を抱き工夫を重ねていたから、秀綱に会つたことは大きな転機になつたのではないか。更に興味があるのは、宗厳もまた秀綱と似たような境遇で、小なりと雖も柳生の城の城主であつた。そのことも二人が意気投合する原因であつたかも知れない。

そして宗厳もまた秀綱と相似た運命をたどる。彼は松永久秀にしたがつていたが、久秀は有名な野心家であつて、將軍義輝を殺し、大仏殿を焼き、信長に従つたり、叛いたりして、結局一五七七年に自滅するという運命をたどる人物である。

宗厳は一五七五年（天正元年）柳生に隠棲している。権謀術数のみにくい戦、血で血を洗う戦国の世にいや気がしたのであらうか。秀綱と同様に兵法の研究に打込んだらしい。それは彼の残した兵法書などによつて推察できる。元来兵法などというものは書きものになりにくいものであることは言うまでもない。宗厳が書いたものも、具体的なことは口伝によるという所が多いが、それ以外に宗厳が探究したことは、兵法者の心理学とでも言うべきことがかなり多い。禅味をおびているから禅をも学んだのかもしれない。とすると兵法者の道というのは、やはり人間の生き方につながるものとして彼は位置づけていたのであらう。そのことが後に家康に召されて、無刀の術を示したときにあらわれたのかもしれない。

一五八五年というともう秀吉の時代であるが、柳生に隠田ありというので秀吉に領地を没収されるという不運もあつた。

さて文祿三年（一五九四）家康は石舟斎を召した。この時既に六十八才であつたが、家康に妙技を披露している。家康はその場で石舟斎に誓詞を書いた。いわば弟子入りしたのである。この時宗矩は二十四才であつたが、父に同道して、宗矩が家康の幕下に加えられた。

さて次は宗矩であるが、彼は関ヶ原、大阪夏の陣などで功をたてたということが徳川実記にある。関原役後宗矩は柳生旧領三千石を与えられているから、やはり拔群の人柄であつたと思われる。秀忠の師範

役として彼は秀忠にしたがつて大阪夏の陣に出陣する。この時秀忠の本陣が大阪方に襲われ奮戦。7人をたおして秀忠をまもったという。いわゆる殺人刀を揮ったのである。これ以後は彼の武勇伝はないといつてよい。

一六二二年（元和七年）秀忠の嗣子家光が誓詞をいれて、宗矩は師範となる。家光は十八才。以後一六二九年但馬守、一六三二年（寛永九年）惣目付（後の大目付である）制定に当り、えらばれて四人の惣目付の一人になる。一六三六年一万石の大名となっている。一介という程でもないが、兵法家が大名になったのである。宗矩の武家社会における力量には相当のものがあつたと思われる。

以上三名の生きた時代とその生き方、行動の仕方を見て来たが、三名とも境遇には似た所がある。城主であるが、大名ではない小名だつた。そして単に強さのみを誇るただの剣士ではなかったようである。いわゆる文武両道にわたる修行をし得る境遇であつたのではないか。そういう教養が兵法家伝書を生み出すもつたのではないか。

（二）泰平の世における剣の道

— 剣道修行の哲学と工学 —

一、進履橋—新陰流兵法之書

進履橋の一卷は「新陰流兵法之書」とも言われ、上泉秀綱から宗厳へ直伝された技法の目録とも言ふべきものである。しかし、次第に項目が進むに従つて、心の問題が出てくる。次に概略を紹介しよう。

冒頭の所はまず、次のように書かれている。

（○は、わかりやすくするため筆者がつけたもの—編集部注）

新陰流兵法之書

○三 学

一、身 構

一、手 足

一、太 刀

右の三个を以、初学の門としてはより学び入べし。

○就三学、又五ヶ之習

一、身を一重になすべき事

一、敵の拳を我肩にくらふべき事

一、我拳を楯につくべき事

一、左の肱を延すべき事

一、さきの膝に身をもたせ、あとの膝をのばすべき事

これらはいずれも入門編というべき項目があがっていると見てよい。これに続いて

○三学之初手、是はかまへ也

○九箇

○天狗抄 太刀数八

○運策於幃幄之中決勝於千里之外

○就序破急、三九廿七ヶ之截相之事

という項目があがっている。三学之初手というのは更に五つの太刀形

の名前があがって、それは一つ一つ立合って口伝をうけるものだと書いてある。書くことが出来ないとも書いてある。

九箇について同様な書き方。これも書き表しにくいとある。

天狗抄には太刀数八があがっていて、その外に太刀数六というのがあり、後者の方は心の理をきわめることのものである。柳生十兵衛の「月之抄」にその註がある。

次の「策を幃幄の中にめぐらす」というのも心の問題を説いている。次の「序破急につき三九廿七ヶの截相の事」というのは、真剣を以て習うことである。

最後に秀綱、宗厳、宗矩の名前が書いてあるから、まさに相伝のことを表したものと言える。この形式はこのあとの殺人刀、活人剣についても同様である。

これを見ると、既に上泉秀綱もただ単にわざだけを問題にしているのではなく、心の問題に強い関心があったことがわかる。

（進履橋というのは、漢の高祖の名臣張良が青年時代に、土橋の上で貧乏くさい老人（実は黄石公）に会い、落した履を拾ってささげて兵法を授与された。その兵法で天下を治めたという故事にちなんでつけたもの。）

二、殺人刀（上）——人を切るにはあらず

次の殺人刀と活人剣は宗厳と宗矩の二代にわたって、実践的研究を行った結果、生み出されたものであると巻末（兵法家伝書—編集部注）の所に宗矩が書いている。そして進履橋が本書であって、殺人刀と活人剣は別伝であるとも述べている。

そして最後に面白い事を書いている。

「此巻上下を、殺人刀、活人剣と名付たる心は、人をころす刀、^{かえつて}却而人をいかすつるぎ也とは、夫れ乱れたる世には、故なき者多死する也。乱れたる世を治めむ為に、殺人刀を以て、^{すでに}已活る時は、殺人刀即活人剣ならずや。ここを以て所名付也。」

宗矩は明らかに、泰平の世の剣法ということを意識している。その認識の上に剣法の道を追究したのである。そしてそれは宗矩によれば、上泉秀綱のものである進履橋の別伝なのである。それは言いかえれば、別伝も秀綱の思想だということになる。そういうように考えると、秀綱の柳生親子に対する影響は非常に大きいものがあつたということになる。さて、殺人刀、活人剣の二巻は剣の道に対する哲学と技術を、文字表現の限界まで追究して書き表わしたものであるということが出来るようである。まずはじめに、兵法家伝書上巻序というのがある。

古にいへる事あり。^{つわものは}「兵者不祥之器。天道惡之。不獲止^{これをもつ}用之、是天道也」

と老子の語をあげて、何故兵を用いることが許されるかという反省をし且つ兵法の使い道を説いている。

人間が悪をなすときは、一人の悪によつて万人が苦しむのだから、一人の悪をころして万人を生かすのである。そういう使い方をすれば人を生かす剣ではないかと言うのである。

「兵法は人をきるとばかりおもふはひがごとなり。人をきるにはあらず、悪をころすなり。」

というのである。

次にその兵を用いる法があるとして、大将の兵法のことを語る。

「国の機を見て、みだれむ事をしり、いまだみだれざるに治る、是が又兵法也」というのは、一人対一人の兵法を国にまで及ぼした思考である。

更に友人との交際で終始つき会いをするのもまた兵法の道である。

まず兵法の書のはじめに、このような序があることは、考えてみると意味深いことである。戦乱の時代にこの書が書かれたとしたならば、恐らくこういう形はとらなかったであろう。戦乱の時代ならば、何よりも剣技が第一であって、何といつても命をとるか、とられるかである。そういうこと以外に兵法の意義を求める必要はないわけであろう。

しかし宗矩がこれをまとめたのは、既に泰平の時代に入っているのだから、極端な言い方をすれば剣そのものが不要の時代になっているのである。技だけなら存在の意義はない。もちろん泰平が永遠につづくという保証は当時生きている人々にとっては何等ないわけであるから、治に居て乱を忘れずという姿勢が全く失われていたわけではないことは勿論である。けれども人々の気持からいって、当分ゆるぎそうにない泰平を目の当り見ては、どうしてもやたらに剣を振廻す気になれないのが普通であろう。

宗矩の言う如く大将の兵法、機をみて敏速に対応する姿勢に通ずるという言い方をしなければ、存在意義を見失うことになり、剣を学ぶこと、教えることの意味がなくなる。これは大変意地の悪い言い方をしたのであるが、もし宗矩の考え方がそうであるとすれば、剣法を必死に守ろうとする姿勢だということになる。それはしかしこの内容を

見た上で、後でもう一度考察することにしよう。

三、大学は初学の門也と云事

—習をつくして習なきにいたる—

さて、それでは宗矩は剣の修行の内容をどう述べているのか。その最初に来るのが、習をつくして習なきに至るの論である。

冒頭に「大学は初学の門也と云事」という語句をあげて説きおこす。凡そ家に入るには、門から入るではないか。そうだとすれば、ここで門というのは、家に入る入口だということである。家に入って主人に会うには中まで入って行かなくてはならない。初学の門というのは、学んで主人に会うための入口ということである。つまり大学が門ということとは、大学という文書は入口なのである。

つまり、大学という書物、文字を見て、家に入った、主人に会ったなどと思つてはならない。それは入口にしかすぎないのだ。

宗矩は、文書は道に至る門でしかないのを錯覚して、主人に会った、道に至ったと思うなというのである。言いかえれば、文書を見てから、本当に学習することがあるのだというのである。

「何程学問をし、文字多しりても、道くらき人あり。書に向てはよくよみ、古人の注のごとくよみながせども、道理にくらければ、道をわが物にする事ならざる也」

という。ついで、大学の致知格物ということをはひいて次のように言う。致はつくすということである。知をつくすというのは、凡そ世間に人のしるということ、ありとあらゆる事の理をみな知りつくして、知

らないことがないの言う。

格物とは事をつくすという意味で、その事々の道理を知りつくせば、その事々皆知らないことなく、しないということがないということである。そうなる道理が明らかになり、胸に何もなくなつて来る。そうすると何事も仕よくなるのである。

こういうことは兵法でも同じで、ありとあらゆることを習いつくして、稽古をしつくと習ったことが胸からなくなつて、何心もなく格物の心となる。習稽古の修行がつもりつもれば、手足身体にはその動きが残るが、心にはなくなつて、何をするにも自由にできるようになる。これが諸道の極意であるという。

「ならひをわすれ、心をすてきつて、一向に我もしらずしてかなふ所が道の至極也。此の一段は習より入て、ならひなきに至る者なり。」

これがこの殺人刀の目標なのであるというわけである。つまり意識ゼロの境地で行動できるようにすることがここに述べることの目標、到達点だと最初に目標をあげたのである。

近代の教育では、こういう人間修行というものを忘却してしまったのではないか。たとえば「わかる」という言葉は現代の学校では、ふんだんに使われる。しかしそれが大抵は言葉の世界のことで、つまりそれはわかったと思う本人が自分だけでわかったと思つているにすぎない。実はそこから先に実践があつて、その事を本当に自分のものにするのが出来なければならぬのである。しかしそれがすっかり忘れられている。

そういう思想が最もよくあらわれているのはペーパーテストで、言葉の世界で学習したかどうかをきめようとする。宗矩流に言えば門の所へ行つたかどうかを見ているにすぎない事なのである。そして学習したものは、それでよいのだと満足している。これでは人間にはならないのではないか。

さて、宗矩は、続いて習をつくすというその習の内容をあげている。まず立ちあいの場合の心のあり方を述べる。いくつか紹介すれば、

- 一、氣と志との事
- 一、表裏は兵法の根本
- 一、草を打つて蛇をおどろかすという事
- 一、機前の兵法
- 一、懸待二字仔細の事
- 一、二目遣の事

等々、あまりなじみのない言葉がならんでいる。

たとえば、表裏は兵法の根本だというのは、つまり敵をのせる手だというのである。表裏があると知りながらも、仕かけられるとのらざるを得ない。のる者に対してはのらせて勝つし、のらなければ又そこで次の手が生み出されるということになる。極めて実践的な姿勢である。これは人生の態度にもつながる。

また懸待二字仔細の事というのは、懸とは立ちあうや否やきびしく切つてかかること、待とは敵のしかけを待つ心、用心していることである。この懸と待のあり方、関係がむつかしい。たとえば敵にちかくよつていつて懸にし、太刀を待にして敵の先をおびき出すというあり

方がある。また心を待にして身体を懸にする。心が懸になればはしり過ぎてよくないから心を待にして身を懸にするのである。

また大拍子小拍子、小拍子大拍子のことというがある。これは敵が大きいかまえて太刀を使えばこちらは小拍子に使う。敵が小拍子ならばこちらは大拍子に使う。たとえば謡いと鼓のように、下手な鼓では上手な謡いもうたいたいにくいように、敵のリズムを外すことを実行するのだという。

また二目遣いというのは、敵のはたらきを見ないようにして見る、見るようにして見ない、という見方をするというのである。

打にうたれよ、うたれて勝つ心持のことというのがある。人を一刀に切る事はやすい。人に切られない事はむづかしい。そこで人が切りかかって来たとき、身にあたらず太刀の間合をあらかじめ測定して、敵にうたれるのである。敵はあたると思つて打ちこむが、間合がとつてあるから死に太刀となるというのである。

こういった内容の事が細かく言えば数十項目にわたっているが、面白いことに、わざの具体的なことになる、文字に表現できないということが随分と多くある。たとえば、

- 一、太刀づれの事
- 一、敵身方両三寸の事
- 一、身の早速ぬすみこむ事
- 一、上段にからみの目付之事
- 一、車の太刀、左右ともにわけめ目付之事
- 一、三尺つもりの事

などとある。これらは柳生十兵衛が月之抄というのに解説を加えているが、それもなかなかわかりにくい。その事が次のように書かれている。

「右六ヶ条は師匠と立相て、習口伝せずばなるまじき条々也。」
つまり、実践的な学習、行動によらなければならぬ学習なのである。こういう所がまだ他にも多くある。

四、心の修練

宗矩は全体として心の修練を問題にしているが、たとえば風水の音を聞く事、病気の事などという項目にあらわれている。

風水の音をきくという所では、不用意に立相つて敵に仕かけられると、日頃習ったことも出ないでやられてしまう。立相以前の心構えが風の音を聞き水の流れも聞きとる程心をすませというのである。

病気の事というのは、またなかなか面白い。

「かたんと一筋におもふも病也。兵法つかわんと一筋におもふも病也。習のたけを出さんと一筋におもふも病、かからんと一筋におもふも病也。またとばかりおもふも病也。病をさらんと一筋におもひかたまりたるも病也。何事も心の一すじにとどまりたるを病とする也。此様々の病、皆心にあるなれば、此等の病をさつて心を調る事也。」

要するに一筋に思いこんだらだめだということである。そしてこの病をさるに第一段階、第二段階の修行の段階があるという。

「一向に病をさらんとおもふ心のなきが病をさる也。さらんとおも

ふが病氣也」などと禪問答のような叙述がつづく。心を実践するのであつて、わからうとするのは間違いであろう。

そうして最後に、平常心ということと、ほうしんのかん放心心を見せよということ、共に禪の語録にあるが、この語をにかけて解説している。これもまた実践によって身につけることである。

平常心というのは、唐代の禪僧馬祖道一の言葉であるが、宗矩は次のように言う。弓を射るときに弓を射るという心があれば、心がみだれて弓が定まらない。太刀をつかうとき、太刀を使うということにとらわれたら太刀先が定まらない。物を書くときに、あまり書くということにとらわれると筆先がふるえるではないか。弓を射る人はそれを忘れよ。太刀を使うときはそれを忘れよ。何もしないときのような心でやればすべてのことがすらすらとできるのだという。

こういうように宗矩は言う。それはわれわれも心に思い当ることがあろう。恰好のいい所をみせようなどと思うと、とたんに失敗するということは経験したことが多いのではないか。無心の境地で出来るようになるまで習をつくす、修鍊をしなければならぬということである。修鍊をしなければ、どうしても何かをするときに、その事をするのだという意識が働くのでだめなのだ。修行をしつくして、もうそのことが気にならぬところまでなじんでしまうことが大切なのだということであろう。数多くのわざについて、そこまで修行を重ねて、気にならぬようになることは大変なことである。しかしそれが修行だと宗矩は言うのである。生涯をかけての修行ということになるのであろう。宗矩はそれを見せよと思っていたのではないか。

放心心を見せよというのは更にむづかしい。ますます禪問答くさい

が、心をはなつのである。犬猫もつなぎがいはしておけない。心も何かにつないでいることはできないのだ。たとえば、人を敬うという敬を大切と心得てそれにとらわれれば、一生それにとらわれっぱなしになることができれば、それは立派だが、そんなことはない。それからちよつとはなれば、敬でなくなる。そして心が乱れることになる。だから、敬にとらわれてはならないのだ。むしろはなれた方がよい。本心に心得た人は、それからはなれて心がそうなっているのだ。そういうように修行しろというのである。これも実践によって到達する境地であろう。

五、活人剣（下）

石舟斎は当流に構太刀を皆殺人刀と言い、構えのないのを活人剣というと言っている。

つまりさまざまな構えを生かすのは何かといえば、敵の動きを察知して行く目のつけ所が肝心で、それに従って構えが変幻自在にかわつて行く、生れて行くのである。その目のつけ所を手字種利剣しゅじしゅりけんという。この一語につきるという。これは隠語である。測定するポイントとも言いか。

たとえば有と無という目のつけ所がある。太刀を握る手にある。あらわれる時は有、かくれる時は無である。凡夫は有を見て無を見ないが、達人は有をも無をも見る。

また水月ということ。敵と我との間に凡そ何尺あれば敵の太刀我身にあたらぬという測定があつて、その距離をおいて太刀を使う。此の尺の中へふみこんで敵に近づくのを月の影が水にうつるのにたとえ

て水月というのだと説明する。

また神妙剣ということがある。十兵衛はそれをへそのまわり五寸四方なりと説明している。自分についていえば、これは右にかまえても左にかまえても、へそのまわり五寸の所をはなれない。敵の方を見るときは、そこへ目をつけて見るのである。

この神妙剣見る事、三段の分別という所には、心にて見るのを根本とする。目で見るのは心の次である。その次に身足手で見るのである。身足手によって見るというのは敵の神妙剣に自分の身足手がはずれぬようにすることであると云う説明がある。

心は水中の月に似たり、形は鏡の上の影の如しという句を兵法に適用して考えてみるとどういうことになるだろうか。月の影は水にすぐうつる。雲が切れれば遠くの月がすぐさま水にうつっている。そのように心がうつるようにする。水というのは神妙剣の座である。

つまり心の動くままに身が動くようになるのである。それを別なたとえ方をすれば、神妙剣の座を鏡にたとえてみれば、わが身を鏡にうつった影のように神妙剣の座にうつせということなのである。

心をかえす事という意味は、一太刀打ってそこに心をとどめていては、一瞬心が空白になり、そこを敵にうたれるのであるから、一太刀打ったら、打った所に心をおかず、次を見ることである。次へ心がゆくのである。

捧心というのは、心が動けば身の様子が変わり、それが見えるものである。そうしてそれが腕の肱から手首の所へあらわれる。それを見て敵の心をさとり、まだ動かぬ前にうつという心がけが必要である。

この心をさとのことは書物ではだめである。聞いてもだめである。自分の力でさることなのである。

このような心の動きを中心にした項があつて、その最後に沢庵の著した不動智神妙録の言葉、「心こそ心まよわす心なれ、心に心、心ゆるすな」という語をひいて、心の大切さを説いている。

活人剣の最後が無刀之巻となっている。

六、無刀之巻

無刀というのは、石舟斎が家康に召されたとき示したという至妙の芸だといわれるが、これについて宗矩は次のように述べている。

無刀といっても必ずしも人の刀をとらなければならぬと言ふことではない。又刀をとつて見せて是を誇るということでもない。自分の刀がないとき、人に斬られまいとする無刀である。これが総論である。

すこし細かく考えてみれば、とられまいとするのを是非とろうとするわけではない。とられまいとするならとらなくてもよい。とられまいとすればきる所まで行くまい。それならそれでこちらは切られなければよいのである。

人の刀をとるということより、刀を持たなくて人の刀をとつて自分の刀とするという覚悟なら、どんな道具でも使えるではないか。竹の杖でもよいということになるではないか。こういう覚悟なのだ。

これは更に言えば自分は手で、敵は刀でという覚悟である。ということは相手の身にびつたりと寄りそう覚悟がなければならぬ。

このような無刀の精神の叙述のあとに、大機大用ということ、心の働きを表現しようになる修行のあり方を述べている。

無刀などということは、相手の状態に応じて自由自在に心と身体が働くようになることによって成立つのであるが、それはあらゆる場に

臨んで自由自在に行動できるように不断から修練をするのである。

それはもう日常の心がけによるのである。たとえば座敷にすわるときには、上を見、左右を見て、何か落ちるものはないかと心をくぼるのである。戸障子の所へすわるときは何か倒れて来ないかと注意を払い、貴人の近くに伺候するときには、何か不慮の事がおこりはせぬかと神経を使うというように、あらゆる場面に応じて、臨機応変の処置がとれるような姿勢をつくる。

こういう修行を積んだ人の前に出ると、猫の前の鼠の如く身がちぢむ思いをするものである。この辺の宗矩の語り方には実感がこもっている。

そして最後に「心は万境にしたがつて転ず、転処実我能く幽かなり」などという禅の語録を引用して、心のあり方を説く。心が一所にとどまっていればその場のたたかいに負けるのだ。時々刻々、その場その場に最も適した対応の仕方が出来るようになって、人間は最も充実して瞬間瞬間を生きて行くことになる。

まだあと語録の引用は続くが、戦場の剣から泰平の剣になるには、これだけ心の剣にならなければならなかったのではないか。しかし心の修練というも、あくまで実践的なのである。実戦の場で、究極までおのれの心をつきとめたものが、この剣法であり、無刀であり、活人剣なのである。

すなわち具体の剣のあらゆる実戦的修練において、人生のあらゆる場のあり方を体得しようとしたものであろう。

言いかえれば、剣を人生の象徴としてとらえているのである。これが泰平の世に剣の道が生きながらえることができた理由である。

《第三章》

現代生活における道の探究

(一) 生涯かけて何をどう追究すべきか

生涯教育などということが最近盛に言われている。これはどうもその必然性がどこにあるかが不明な流行のようである。学校教育の拡大が一通り終わったから次は社会教育だという程度の簡単な考え方であるとしたら、どうもいただけない。というのは、現在の教育の課題が、どこにあるかということについての認識に欠ける所があると思われるからである。

現在一般に考えられている生涯教育という概念には、現在までに成立している教育のただの延長という考え方しかないように思われる。そういう考え方で新しく生涯学習するというような実態が成立するであろうか、人間がどんなことでも生涯学習をつづけるには、本質的な情熱がなくてはなるまい。そのことが忘れられているのではない。生涯教育を現在の教育観を土台として考えることには私は賛成できない。現在学校教育は受験戦争という大へんな泥沼に入って、どうしても教育とは思えないような状況にある。現在教育を受けている学生生徒たちを見ると、ちょうどケージの中で飼育されている鶏のように、次々と餌が流れて来て、それを食べることを強制されている。教材を理由

もなくおぼえさせられ、受験させられる。よく似ている。鶏はケージの外へ出て餌をついばむことがないから、自分で餌をさがす能力が失せている。足を使って歩くことができなくなっているのである。生徒たちも自ら問題を発見し、それを解くという力がなくなっている。

現実の世界からは目かくしをされているので、現実を把握しそれを処理する能力が失われてしまっている。教科書の言葉ばかりにとらわれているので、自らの目で物を見、自分の頭で考え、自分の身体で処理することができなくなっている。

学校教育では、最後には就職ということが目標としてある。学校には職業への準備という一つの任務があることは確かであるが、それも仕事の能力をつけることを前提として、その結果職業の世界に入るのである。所がその本来の使命が忘れられてしまった。実際に働く能力を身につけることに力を注ぐことがなごりになって、ただの通路になってしまった。それは学校が人間の行動力を把握し、育てることを忘れて、ただ教科書を教える場所になりさがってしまったからである。それは、社会の動向、人間の行動の本質を見ることを忘れてしまったからである。しかしそのことは、今は詳しく述べない。それは学校にのみ罪があるのでなく、近代社会が全体として、そういう事態をつくりあげて来たのである。人々が教育をただ就職への通路としてしか考えないこと、教育が一種の投資となってしまったこと、従って逆に言えば、人々は教育を有利な馬券の如きものとしか考えなくなっているということである。ただそういう自覚がなく、学校へ通い学校で行っていることが、本当の教育だと観念しているにすぎないのである。それを批判的に見る目、真にその実態を見極め、考えてみることをしないのである。

こういう教育の意味や、内容のあり方についての通念でもって、更にその延長としての生涯教育などというものを考えることにはどう

しても賛成できない。そういう考え方で教育をされてもこまるし、そういう考え方で教育を受けようというのもこまる。しかし多分多くの働く人々は、そういう教育を受ける気にはなるまい。就職するために学習した人は、就職してしまつたらもう教育を求めることをするまい。もし生活者として学習をすることを必要だと感ずるとしたら、それは学校で教育しているような事柄ではあるまい。もっと別なものを求めるのではないか。そういうことを真剣に反省しないで、軽々に生涯教育と言ひ出すことはできないのである。

(二) 近代生活における道の喪失

—人間疎外の根源—

第一章、第二章でわれわれはその生涯をかけて学習を続け、道を追究した多くの人々のことを見て来た。一つは茶の湯の道においてその本質を追究し遂に放埒無慚な闘茶を追放した多くの人々のこと、その結果つくりあげた茶道そのもの、一つは戦国の世にありながらただ剣を揮つて人殺しの業を行うのでなく、その中から平和の剣の道のあり方を生涯追究しつづけた三人の兵法者である。

これらの人々の生涯やその業績をかい間見ただけであるが、そこに見られるものは、何よりもまず生涯を学習にかけた情熱こそ、あれだけの仕事をなし遂げさせた原動力であることを感ぜずにはおれない。彼等にとつては、学ぶこと、道を求めることが恐らく楽しみであり、興味のつきないものであつたらう。勿論それだけではない。苦しみもまた人一倍感じたであらう。しかしそこにおのれの人生をかけることに強い情熱をもって、その仕事をなしとげたのであらう。そうでなけ

れば、彼等の残した業績に見られるあのような人生観や哲学は生れる筈がないのである。それは何よりも彼等のなしとげたその仕事の迫力に示されている。

生涯学習をしつづけるというようなことは、何よりもまず、そういった情熱ではないであらうか。自分の生涯をかける、その事に対する意気込み、打ち込む心といったものである。そういうものだから、それは人によつてそれぞれ異なることは言うまでもない。それはその人の生活からにじみ出るものであらう。それを学習意欲というのだと思う。

たとえば、柳生宗矩は、戦乱の中で殺人刀を揮う運命をもつて生れ、それを追究している中に泰平の世になり、それでも剣の道を追究して遂に兵法家伝書にあらわされたような思想や技術、哲学を身につけたのであらう。

剣を振り廻して相手を殺すという場の行動の仕方を、泰平の世の人間修行の道として新たなものとして位置づけた。自由自在の境地と無心の境地とを、実践の中から生み出して来た。彼が随処に引用している儒学や禅の教養もその実践的修行の中において求められ、位置づいている。それは現代の一般教養などというものではない。彼の生涯かけた人生探究の中の一こまなのである。否そういう位置づき方こそ真の意味で一般教養なのではないか。その一般教養は彼のつくりあげた人生の裾野をなしている。見事に摂取され、そこに芸術的とも言ふべき思考と行動とを生み出している。彼が生涯かけてチャレンジしたことの結果である。生涯学習の最高の姿というべきであらう。

さて現代では、柳生宗矩のように修行に生涯をかけるものがあるのであらうか。現代的に言えば宗矩は職業に生涯をかけたのである。現代はそういう人が生涯をかける職業といえは芸術的な仕事というこ

ともなろう。近代産業といわれるものの中でそういう仕事をさがすことは出来るのだろうか。現代はどうも産業の中の仕事に生涯をかけるという事を考える時代ではないのではないか。とすると宗矩のように、そこに生涯をかけて学習するということが成立たない時代だといってもよいのかも知れない。

むしろ職場の仕事をはなれて余暇の時間に何をするかというように考える時代である。もつとも産業という巨大なシステムの中で、産業という企業を経営して行くという地位の取得に生涯をかけるという人々は今でも多いであろう。それは官僚を志望して将来は課長部長をめざすという若者が多い所にもうかがわれるが、そういう人々は権力、金力に生涯をかけていると言ってもよいのかも知れない。

これはある意味で政治的なものに関心興味をもちそこへ生涯をかけるということであるとも言えよう。しかし多くの人々がそういうことに生涯をかけることになるというのは、危険な現象である。政治とはどうしても人の心をふみにじるものとならざるを得ないからである。金力とか権力とかが人間自体にとっては意味をなさないのであることは誰も知っているが、しかもそれに動かされている。それは社会的存在としての人間にとつてやむを得ざる手段なのである。昔から政治を行なうものに哲人としての資格が要求されるのは、そういう政治の社会的役割が自覚されているからに他ならない。

近代日本は百年前から、社会的な目標としては富国強兵などという目標をかかげ、人々にはそれへ向つての個人個人の努力目標として立身出世などという目標を打ち出して、なりふりかまわず努力して来たのである。そこに人間存在に必要な人々の心の文化が阻害される社会が生れて来たのである。こうして産業社会といわれる社会ができ上つて来たとき、官僚機構も、企業の機構も、他人を道具に使うことを当

然とする社会が生れて来ている。人間不在の社会が生じたといわれる所以なのである。

そこには、仕事というものに生涯をかける場がなくなっている。人々は巨大なシステムの中の歯車として位置づけられ、道具としてしか存在できなくなりつつある。人間は人間自身のために存在するより組織のためにあるように位置づけられる。人間のための官僚機構でなくして、また人間のための企業でなくして、そういう組織機構のための人間となりつつある。そういうことに人々がならされてしまつて、そのことを不思議に思わない時代となつていく。

こうして本来人を育てること、人々の心を耕すこと、文化の力を育てることを使命とする教育も、人々を道具とし、いわゆるロボット化する姿になつて来る。知らず知らずに人間が人間ならざるものへと育つような制度が巨大になりつつあるのである。そういう方向で人々に生涯の教育が与えられるということになつたら社会は崩壊に一步近づくことになるのではないか。

現在の巨大な学校教育制度をつくりあげた思想で生涯教育の制度ができるということはもつともいけないことであろう。人間を不在にする危険が至る所に存在するからである。

柳生流のような、はじめは人を殺す術としてあつたものも、それを人間修行の道として探究しようとした人間的思想を根底にして、その道の探究をした人々の生涯の学習によつて人々の心を育てるものとしての道が開けたのである。今何よりも必要なのは、そういう人間を根底にした思想による実践的探究をする人々が情熱をもつて新たな探究をはじめめる事なのではないか。新たな道を探究する人々の行動こそ、新たな社会をつくる生涯学習の道をつくりあげることになるのではないか。

昔から言われている。制度は人間を亡すと。制度の中で制度にしたがつて行動することは、人間の創造性を喪失させるのではないか。今こそそういうものからはなれた個々の人々の創造的な営みを大切にする時なのではないか。

(三) 生活実践の中での探究

—仕事の中にも道はある—

さてわれわれは何を追究すべきか。何にチャレンジすべきか。

さきにも述べたように、人々は職業というものに生涯をかけるというような場におかれていないことは確かである。特に近代労働というもの、人間の仕事への主体性を失わせる場になっている。現代は労働を売りもの、買いものとして考えている。分業、流れ作業、機械化、自動化という方向は、人間をロボットの如く扱う場をつくり出した。人間は仕事の場を自ら把握し、それを制御するという行動力を働かさなくても労働しうる状態になりつつある。つまりロボット化である。そういう単純労働に埋没してしまえば、もうそこに人間が生涯かけて学習するものは何一つありはしないのだ。一見仕事が楽になったかの如くであるが、実は退屈で、苦しみでさえある。

しかしもちろん、そういう職場での労働でも多少の訓練は必要であるから、そのための学習が行なわれる。それはしかし労働を売るための学習であって、人間の最少限の努力にしか値しないものである。それは賃金との交換のために行なわれる取引でしかない。そこで人間として生きているのではない。

すべてがそうだというわけではないが、こういう思考は極めて一般

的であり、たとえ自覚しなくともそういう行動になっている。それがまた組織の中の人間としてのあり方なのである。

しかし、これでよいのか。われわれは主体性を回復しなくてはならぬのではないか。

昔一貫した作業で一つのものをつくりあげるといふ仕事をした人々は、そこから創造的なものを生み出したのである。工夫と努力は自分が自分の仕事を支配している状況の中から生れて来たのである。

そういう意味では、人間が主体性を回復する道は、自分の仕事の場を総体として把握することではないか。単純作業のスイッチマンから、職場全体を把握して仕事をする人間にかわらなくてはならないのである。

労働の形態も転換しなくてはならぬのである。仕事の場合は複雑なシステムとしてつくられている。そこでは、近代科学と技術が駆使されて、複雑な部分が組み合わされた巨大なシステムが出現している。それを把握し制御するには人間の側の行動力もそれに対応できるように形成されなければならない。現在は、それを全体として管理する人間と単純作業をする人間とに分業化されているが、行く行くはこの作業形態そのものが転換しなければならないであろう。そこには新たな人間の学習が必要になるであろう。そういう営みが職場の新しい営みとなって来る必要があるのではないか。

これは企業という人間の集団の中で、全体の人々の努力で実現してゆくものであろう。そういう努力は、誰でも、どこでも、気付いた人々の実践によって一歩ずつ実現すべきもので一挙に実現できることではない。人々のそういう方向への努力のみが、人間不在の職場を人間的な場に転換する力となるのである。まず隗より始めよである。

(四) 人生とは生涯の修行であるという事

現代労働の好ましくない状態は職場をはなれてそれ以外の所に自分の人生を求める人々を生み出しつつある。曾て貧しい時代には職場を求めてそういうことが不可能であったが、経済の成長によって人々が生活の安定を得た現在は、多くの人が曾て求めて得られなかったものを得て、次に何かの物質以外のものに人生の満足を見出そうとしている。

現象的には、多くのレジャー産業といわれるものが出現して、人々はそこに人生の満足を得るように統制され出している。職場が苦の労働、それ程でなくとも人間的文化的な欲求を満足させるに足りないとするれば、それ以外に何かを求めるのは当然であろう。何時の時代でも人間はそういうものを必要とするのであろう。それは歴史が物語っている。前述した茶の湯の発展の姿の中にそういうものを見ることが出来る。

南北朝から室町の初期へかけて、動乱の中で戦闘に明けくれた人々は、それからのがれて、闘茶という遊戯の中に人生の楽しみを見出したのであろう。もとよりその他にも多くのものがあつたであろうが、まず人々の求めたものが、遊びの中に人々の心の満足を見出そうとすることであつたのである。

しかしそれがやがて珠光や紹鴎や利休やその他多くの人々によって茶の湯の道を探究する営みに転換して行つたのである。人々の文化、すなわち人間の心の開発が次第に洗練されて行くのである。そうして一時的な官能的な単なる娯楽から生活そのものの文化的形成へと発展して行つたのであろう。そういうものを本来人間が求めていることは、以後四百年もの間、茶の湯の道が人間社会の文化的な側面を代表して生きつづけて来たことにはつきりと示されている。そしてそれが、人間の生き方の本質的なものを象徴して、生活の指標となつているのである。

たかが茶の飲み方ではないか。考えてみると不思議である。しかし、たかが茶の飲み方であっても、そこに生涯をかけて人生の意義を追究してくれた多くの人々によって、われわれは茶の湯を通じて人生を考えることができる。また生活の些細なことにも、広く深い人生の意義を発見することを教えられる。人々の心がそうして耕されることにより、人間社会が正常に維持されて行く最も強い原動力となつていく。

このように考えると、何も人間が生涯をかけて追究すべきものは、職場の中にだけあるのではない。様々な所にあるのである。誰もが毎日の生活で茶を飲んでいるというその習俗の中にも、偉大な人生の本質的なあり方が追究できるのである。そこに人生の調和のとれた姿を見抜くことができるということを先達は教えてくれているのである。誰にとつても人生はただ一度のたつた一つの人生である。そこで生涯をかけて自らの人生を生きて行くのであろう。

たとえば信長や秀吉は戦う人であつて、そこに生涯をかけたけれども、その生活の本質を自覚するのに利休を必要としたのではないか。茶の湯はまさに彼等の生命をリクリエイトするものであつたにちがいない。そうして彼等なりの一つの人生のまとまりをつけて行つたにちがいない。茶の湯は彼等の武将としての生活の中心に位置づいて、生活のまとまりをつけ、バランスをもたせるものとなつたのであろう。人間としての平衡感覚をつくりあげて行つたにちがいないのである。人生は追究すればする程、広く且つ深い。そういうものを永い年月にわたつて積みあげて行く所に生涯学習ということの本質がある。

人間は生涯にわたつて学習しつづけ、修行しつづけるものである。職場の仕事は通路としようと、日常生活は通路としようと、それは通路である。そしてそこに一つの人生がつくられて行くのである。職場に自己の人生がなく、職場以外に人生があるなどと考えるのは、自分の人生を

分裂させていることである。生涯追究すべきものは人間のあり方そのものではないか。自分の行動をいかに洗練し、瞬間々々をいかに充実したものとすることであろう。その一つの生活がおのれの一つの精神によって貫かれていること、それが本当の人生というものである。

前に紹介した『山上宗二記』に次のようなくだりがある。

師（利休）に問い置く密伝を拙子（宗二）注するの条々

一 御茶の湯者朝夕唱語。一、志。二、堪忍。三、器。

茶の湯をやる者が朝夕に心に言いきかせることは、第一に志をもつこと（現代語でチャレンジであろう）、第二に耐え忍ぶこと、第三に人格をみがくことというのである。つまり彼の努力目標であろう。

また茶湯年来稽古というくだりがある。これは、能の世界で有名な世阿弥の述べたことにならって、利休が考えたものである。

「十五ヨリ三十マデ万事ヲ師ニマカスル也。三十ヨリ四十マデハ我ガ分別ヲ出ス。習、骨法、普法度、数奇雑談ハ心次第ナリ。但シ十ノモノ五我ヲ出スベシ、四十ヨリ五十マデノ間ハ師ト西ヲ東ト違ッテスル也。其ノ内我流ヲ出シテ上手ノ名ヲトル也。茶ノ湯ヲワカクスル也。」

三十にして立つということがあるが、それまでは専ら師匠にまかせて修行せよ、三十になったら半分位は独創的にやってみよ、四十になったら反対のことをやってみよという。我流を出すといっても野放図ではあるまいから、おのずから法になかったものが生れるというのである。茶の湯をわかくする、清新の気を吹きこむというのは面白い。新たなものを生み出すのである。

宗矩が習をつくして習なきにいたるという自由自在の境地とよく似ていてではないか。

「又五十ヨリ六十マデノ十年ノ間ハ師ノゴトク一器ノ水、一器ニ移スヤウニスル也。名人ノ所作ヲ万手本ニスル也。」

五十すぎるとまた名人、師匠の手本を大切にするのだという。一段と高い境地に立つて名人の全体像を把えるということである。そして最後、宗易（利休）の今七十才になってからの茶の湯の風体は、自分が名人にならなければ恰好をまねてもだめだという。これもまた人生の無限の深さを思わせるものがある。

「七十二シテ宗易ノ今ノ茶ノ湯ノ風体、名人ノ外ハ無用也。六十ハ才ニ相当ノ儀也。紹鴎ハ五十四ニテ死去、此外、条々口伝在リ」

また利休の師匠武野紹鴎の述べたこととして宗二が書いているのに次のようなくだりがある。師匠に別れたあとという言い方である。

「茶の湯の師に別れて後、師に用いる覚悟は一切の上。仏法、歌道並びに能、乱舞、刀の上、尤も又、下々の所作までも、名人の仕事茶の湯と目明の手本にする也。」

どんな場合でも自分より上のものを手本にするのだという。すさまじい学習意欲である。たかが茶を立てると言うなかれである。その道を探るためには、能から舞から刀まで、これが一般教養というものであろう。一つの道に統合された教養である。現代の一般教養というのは散漫な羅列にすぎないようだ。核がないのである。

それにしてもこういう人々はよく勉強した人たちである。うらやましいではないか。

《第四章》

運転の道の探究

現代社会で道の探究はどういうところに求められるであろうか。それは、どこにもある。あらゆる道はローマに通ずではないが、人々がそれぞれに求めて行くべきであろう。

私は今歴史にならって、そういうヒントとなるべきものを考えてみることにしたいと思う。混乱の中からもすぐれたものを生み出す努力があるという一つの事例としてここでは運転の道をあげてみたい。

現代はクルマ社会と言われる。クルマを使用した交通の場は、現在かなりに乱れていると言つてよからう。年間一万人の人が死んでゆくということも、人間の使う道具によって起った現象とすれば異常なことである。それにも不感性になつていたら、それは根本的に異常な事態である。

クルマには現在殆んどすべての人が関係をもっていると言つてよい。国民がすべて運転する時代といつても言いすぎではなくなった。そういう時代にそのために年々一万人という人が殺されていることに対して、手がないということとは、奇妙なことである。道具を扱うルールがないというべきであろうか。犯罪によって一万人が殺される時代というのを想像したらこれは社会の崩壊ではないか。クルマではそ

れが行なわれていても崩壊ではないのだ。不思議なことである。

クルマが空気汚染のもとだといわれるが、それも馬耳東風である。どうしても規制の手がないというのが現状である。一般的に言えば人々はそのような規制を排除して汚染のために努力する方向に働いているようである。汚染ということにたかをくくっているのかも知れない。これは異常な状態である。

しかし人々は自動車運転の喜びを得るためにクルマ社会のクルマ運転者になろうとして、自動車学校、教習所にとびこんで来る。クルマ社会の異常さには気が付かないかの如くに。

(一) クルマの運転とは何か

運転とは車を動かすと思うのはひが事である。道路上で整然と行動することであると言つたことを言つた人がある。それは同じことを言いかえているにすぎないと言つた人が居るかも知れない。

しかしそれはちがうと思う。車を動かすというのは車という道具が目についていて、そこに神経が働いて出て来る言葉である。道路上を整然と行くというのは社会の中の行動である。どちらの姿勢、態度で運転をしているかといえば、本質的には後者である。

宗矩流にいえば、刀を使うと思えば、心がそれにとらわれて刀が本来には使えないのだ、というあれである。習をつくして習なきに至る、心がそれにとらわれなくなると、身体も心も自由自在に動くのであるというあそこの所である。

教習所ではそういう境地を本当にさとらせるようにしているだろうか。

宗矩は、大機大用という所で前に紹介したように、座敷にすわると

きも、障子の所へすわるにも、貴人の所へ伺候したときも常に異常がおこらないかと心を使って行動して、そういう日常を積みあげて、心がいつでも働きを發して変に應ずることができるといっている。平常心と言っているのである。このことは前に述べたが、平常心で運転をすることを現代の人はどれだけ心掛けているであろうか。平常心とはただ普通の心ということではない。無心と言ってもよい。そういう境地を運転について述べたら、どんなことになるのか。運転者は探究すべきではないだろうか。

運転とは車という道具を使うから、道具の使い方も第一歩としては大切であるが、それは、宗矩流に言うと、結局は目の問題になる。場の測定がどれだけできるか、道具が使えるようになれば目も育つて来る。目が育てば道具の使い方もまた上達する。そうしてしまいは自由自在の境地で、瞬間瞬間を処理してゆくのである。宗矩ははじめ構えから入り、次第に活人剣に進んでゆく。どんなかまえがあろうとも最後は「目付」に帰着するといって家伝書の下巻を専らそれに力を注いでつくりあげた。

現代の運転教習は到底宗矩に及ばないのではないか。三五〇年以前の教育学に劣っているのである。

また利休の孫の千宗旦の著した禅茶録という書に、

「それ茶の原意は器の善悪を扱はず、点ずる所の容体を論ぜず、只茶器を扱ふ三昧に入つて本性を觀ずる修行をするにあり。」

と言っている。彼も禅の研究をした達人であつたが、茶を点てるというのも、自分の本来の姿をきわめることだといふのである。

運転を単に技能としてとらえ、手先のこととして、それをおぼえれ

ば車の運転ができる、と考えたのは近代的な技術教育の思想であろう。近代技術教育は、知識と技能との二つの分野を教育すれば行動する人間ができるという錯覚をもった。これは何も自動車運転に限ったことではない。そこに人間が失われたのである。そういう二つの分野をおぼえればよいのでなく、運転を通じて自分をきたえるのである。

その心が失われたのは社会の動向であることは前に述べたが、教育をする立場の者は、そのことを学習者に自覚するような指導をすべきであろう。

そういう指導とはただ言葉で説明することではない。修行の場、つまり訓練のカリキュラムがそうなっていないてはならない。自分の能力で場にぶつかる、間違いをおかす、それを自覚し、反省して努力する、そうして一つの課題をのりこえてまた次へ進む。そういう修練の場として運転を学習する場がつけられていなくてはならぬ。そういう場での修練の連続がよきマナーの運転者をつくるのだ。

たかが運転などというなかれなのである。

(二) 運転のマナーとは何か

交通法規は現在道路上のマナーとは考えられて居らないのである。法規をつくる方も、それによつて規制される運転者も、一口に言えば、免許証取得のための関門だ位の考え方である。これも近代的法規主義の考え方であつて、それはそれなりに役割を果しているが、本来は人間の心の問題なのである。つまりモラルなのである。政治としては法規による取締りなのだが、人間社会の文化の問題としては、心の問題でありモラルなのである。

法規を教えるという教習の姿勢が、実は法規をマナーにまで定着さ

せることを妨害しているのである。

これも柳生宗矩流に言うところ、初学の門でしかないのである。交通法規を読んでこれが運転の道なりと思うなかなのである。そこから先に家に入って、主人に会うということがあるではないか。それは習をつくして習なきに至るという過程をたどらなければならないのだ。そういう行動をさせるような交通法規の教育は現在はないのである。条文の羅列主義なのである。根本が抜けているというべきではなからうか。

近代は道德の教育を言葉によってやるという方式しかもっていない。つまり道德的知識を与えれば、それで道德的行動もできるという考え方なのである。これも近代教育の錯覚であったことは漸く最近反省され出した。マナーとかモラルとかは場をつくって行動を通して教育されるべきものだということが漸く自覚され出している。

たとえば、食堂でのマナーを身につけるには、食堂でなければならぬ。そういう場に適應する神経をつくるのである。そこで自信をもつことがマナーとして定着する大きな要素なのである。誇をもつて行動するようになるのである。よきレストランの伝統はそういう人々が次々と受けついでたまたたて行くのである。それは全体としての生活の場なのである。ただ法規、マナーの項目ではないのだ。

自動車学校でも、そういうすぐれたレストランのようなムードをもって、教習生の生活全体を導くような場となることは可能であろう。食堂もあろうし、洗面所もあろうし、車の運転の場もあろうし、それぞれが、単に運転技術を教える場でなく、社会生活のあり方を身につける社交の場でなくてはならないのだ。

学校が免許証をとらせる場になりさがれば、それに応じて教習生も馬券（免許証）を買いに来るだけのことになる。そこから生れるドライバーが犯罪をおかすことになるのである。

山上宗二記に次のようなことがある。茶の湯というのは一種の社交の場であるから、その社交の場での振舞い方についての注意なのである。これはもちろん実践によって身につけて行くこととして述べているのである。亭主と客とに分けている。

「亭主振りのこと、心になるほど（心の底からという意）客人を敬ふべし。常の参会する人をも、心の底には名人の如くに思ふべし。」

「客人振りの事、一座の建立にあり。条々密伝多き也。（中略）常の茶の湯なりとも、路地へ入るより出るまで、一期に一度の会のように亭主を敬畏すべし。世間雑談無用也。夢庵狂詞（以下は雑談の内容を言う狂歌である）

我が仏、隣の宝、賀舅、天下の軍、人の善悪。（これだけの話を封ぜられるのである）此の歌にて心得べし。」

昔の人の茶の湯は、なかなか迫力のある修行の場であったことがうかがわれる。話合うことにも相当レベルの高い話題を用意することになる。これが当時の人々の日常の礼儀正しい人間をつくっていたのであろう。

私はいつも不思議に思うことがある。ドライバーはどうしてああも口ぎたなく人をのしるものなのか。どうしてああも自分勝手なものなのか。気みじかなのか。そこには客人振りも、亭主振りもなくなっている。

クルマは人々の社会行動を悪くするものなのか。クルマという密室の中でただ運転技術にだけ目を向けていると、社会的な場の測定とい

うことに心が向かなくなるのではないか。ここにも教習の際に注意すべきポイントがあるのではないか。前述したように教習の姿勢を人生修行に転換することなのである。

マナーのついでにバスなどの公共の交通機関の場での公衆の態度についても考えてみたい。やはりクルマ社会のことであるから。マナーが問題になるのは何も運転者に限ったことではない。バスにのる客もまたそうである。たとえば、バス（バスに限らないが）には、この頃は老人席というのがある。しかし、これがそれを設けた意図にしたがって利用されている場にめったにお目にかかったことがない。大抵は若い人が座をしめている。私などがそばに立つても振りむかれたことがない。私のことはともかく、その座を占めるなら、老人が来たら立つ覚悟で、たえずバスの中という場を測定していなくてはなるまい。つまりそういう神経を使うのが、社会の公共の場のしきたりというものである。最近はそのような神経の使い方が全くなかったというのが、六十年以上この世に生きている私の実感である。

こういう実感は老人席ばかりでない。座席へのすわり方から、重い荷物をもっている人に対する態度など、世の中は全く自分一人のためにあるかの如き振舞方が多い。クルマ社会が生れてから日が浅いからそうなのではなく、私たちの若い頃の方がその点では確かにマナーができていたのである。そういう姿勢と、運転したとき、他の車をどうりつける姿勢とには相通ずるものがあるのかもしれない。

(三) 運転の教習とは何か

以上クルマ社会を健全に発達させようとすれば、さまざまな問題があることを述べたのであるが、そこに教習所、自動車学校の役割を再

検討する必要があるはしないか。

教習所は確かに免許証を授与し取得するための便法として生まれたものであろう。しかし現在のようにクルマ社会が発展すると、もうその初期の姿であつてよいのかという問題があらためて考えられてよいのである。

免許証を与えるという方法だけならさまざまな方式があるのである。何も自動車学校でなくともよいのである。アメリカのように高等学校で運転技術を習得させて、あとは簡単な試験という方式もある。その方が教育体系として考えれば合理的でもあるとも言えるのである。しかしそれはまだ将来の問題である。が教習所というものが教育の場所であるならば、それはそれらしく人を育てる場所であればならないのであつて、免許証売り場であつてはならないのである。そしてもし、そういう専門の教育の場がそれとして存在するならば、それはまたそれとして意味のあることである。今の高等学校などで教育するより、本格的なことができるかもしれない。

どちらにしても本格的な教育の場となるには、単に社会制度として教習所があるということでは今の制度の中でただ教習事務をとっているのではためである。

前述した茶の湯の道で人生の本質を探究した人々、剣の道に生涯をかけて学習しつづけた人々のような使命感をもって、運転の道を探究する人が生れなくてはいけないのではないか。教習するという事務などをより前に、先ず使命を感じることであろう。それはそうして、巾の広い人生の学習、人間の文化の歴史の認識の上に成立つものである。そういう人々によって探究されて本質的運転道、それは単なる運転技術ではない、そういうものが生れれば、おのずから人々は運転の道の学習に集って来るであらう。

教習所がコンピュータを置いて次々へと教習生と指導員とを配置するなどという方式をとっている限りは、免許証売り場たる運命から逃れることはできない。それは没落の道につながるのではないか。

そもそも、人にものごとを教えるということは、えりを正してなすべきことであって、単なる制度ではないのである。指導をする人はまず自ら生涯かけてその道を追究すべきではないか。それが指導者たる資格を生むのである。そういうことを茶道、剣道を探究した人々はわれわれに語ってくれている。それが人々に愛され、尊敬されて世に生きつづけるものなのであろう。

山上宗二記に茶の湯の師匠として教えることに對する痛烈深刻な反省の言葉が記されているのを紹介しよう。

「慈鎮和尚ノ歌ニ、

ケガサジトヲモフ（思う）御法ノ トモスレバ

世ワタルハシト ナルゾカナシキ

常ニコノ歌ヲ吟ゼラレシ也。

宗易（利休）ヲ初メ、我人トモニ、

茶湯ヲ身スギニイタス事、口オシキ次第也。」

仏の道を探求してそれをけがすまいとすることこそ努力すべきであるのに、ともするとそれを世渡りの手段とするのは我ながら情ないと思うという慈鎮和尚の述懐をひいて、山上宗二もそれが痛い程身にしみるというのである。茶の湯を人に教えることを身すぎにするのはいかにも口惜しかったであろうということはよくわかる。道に徹すれば徹する程きびしくなるであらう。

運転道の探究もかくありたいし、そういう人々によって運転教習も行なわれるとよいと思う。

茶道の教師も今はだめな人が多いが、昔の人には立派な人が居たのである。これも昔の人がよく勉強していた例である。

江戸の千家の祖といわれる川上不白という人が、表千家の八世啐啄斎宗左に贈った遺言の中に次のような言葉がある。

「啐啄の機と申して、鶏の玉子をかえずに、子成って、子内より出でむとする時、親外よりつき割る。是れは内の事なれば知れぬ物也。恰度子出でむとする時もつつく。互に知らずして其の時に合ふを啐啄の機と云ふ。弟子語らむとする時、師是れを示し悟らする時をたとふ。師をする者、此の儀肝要也。」

これはそうむずかしいから、わかっていただけだと思うが、人の師たるものもつべき心構えについて述べている。師は弟子の心の動きの見えないものを見抜く力を必要とするというのである。つまり弟子の行動を測定して、その行動の背景にある心の動きをとらえるのである。不白の遺言はこの後に更につづけて、弟子が悟ろうとしても、師がこれを知らなければ、だめな師である。反対にいかに悟らせようとしても、弟子にそのチャンスが来て居なければ役に立たないのであると言っている。

ここで悟らせるという言葉は重要である。学習とは悟ることなのである。悟るというのは学習する者の側のことである。そのことが多くの人によくわからない。教える人がしゃべれば学習するという迷信がすっかり定着しているからである。

教習生の隣にすわって、はいアクセルふんで、はいハンドル切って、ハイ何をしてと言って運転をさせていては、悟るという所へもって行くことはできない。そんな教育を川上不白（十八世紀中頃の人）が見たら、二十世紀の今こんなことをしているのかと笑うであらう。或は

涙を流すかもしれない。さてさて情ない人たちだと。

もう一つ例をあげよう。これは桑田忠親氏の著書『茶道の逸話』に出ている話である。利休の孫の千宗旦が、息子の宗左に床の間に置く薄板の置き方を求めたことがある。そこで宗左が置いたところが、ひとめ見て、心になわず、駄目という。また置き直したが、また駄目である。宗旦の機嫌がわるくなつたので宗左は思いあまつて、お父さんは平素から教えてくれないではないかという、宗旦は顔色をかえてお前のような器量では家をつぐことは出来まい。もっとよく工夫しろと言った。そこで宗左も思い直して工夫をしたら、無事に合格した。この時宗旦は教えるということはこういうことだと言つてさとしたという話である。

この形をまねろということではない。宗旦は息子の行動をよく測定して、どこでどんな点を工夫すればよいかと見抜いていたのである。それには行動の分析（その頃こんな言葉はなかったことはもちろんである）をして、人の行動を一瞬に見抜ける力をもっていたのである。人を指導するにはそれ位の研究をしていなくてはならぬのである。昔も今もかわりはないというべきである。

それにしても現代の人は、人を教えることに責任を感じないのか、昔の人のような工夫がないように思える。教習所の指導員の方々はどうだろうか。

われわれの先輩はよい宝を沢山残してくれているのだ。それをたよりに運転の道、その教習の道を探求して世の人のために尽してもらいたいものである。